研究

徳山藩士・兼崎橙堂（とうどう）の足跡と家系

会員　兼崎人士

一、はじめに

明治維新一四〇年にあたる平成二〇年はまた、幕末・勤皇の志士の一人であった兼崎橙堂が徳山藩に始めて最新の西洋砲術を伝えて一五〇年目にもあたる。

四境の役で幕府軍に勝利した長州軍。その勝因のひとつに、最新式の銃・大砲を備え、洋式銃陣を敷いたことが挙げられている。

橙堂については、平成十四年・会誌第二三号『現徳山市域内の明治維新期に活躍した群像たち』（註①）の中で、相州（そうしゅう）（相模（さがみ）の国）警衛など若干紹介されている。

筆者は一族の傍流末裔のひとりとして西洋砲術指南役「兼崎橙堂」について、その足跡と家系の調査・研究を行った。

すなわち、本稿は『橙堂遺稿』（註②）や毛利徳山藩譜録など現存する史料の他、直系のご子孫が所蔵されていた橙堂文書などを使い、徳山藩士・兼崎橙堂の足跡・人物像を明らかにしようとするものである。

なお、橙堂という名は雅号であり、通称名は「昌司（しょうじ）」、諱（いみな）は茂昌（しげまさ）である。本稿では広く親しまれている呼称「**橙堂**」に統一した。

二、家系について（先祖は刀鍛冶）

『我家我藩の記録』（註③橙堂嫡男・兼崎茂樹著）などによれば、その家譜は「兼崎氏姓は藤原。その

先は藤原庶流兼﨑刑部左衛門**茂久**より出る」と記されている。開祖・茂久は、毛利元就侯安芸におられた時に刀鍛冶として仕えていた。関が原の合戦ののち、芸州より輝元公が萩に移られたとき伴随した。徳川家康から防長への領国入りを許されたのは、敗戦から三年後の慶長八年（一六〇三）八月のことであった。（註④）茂久・二男の喜兵衛**茂勝**は別家して周防国・四熊村に居住、鍛冶を勤めた。その子・**三蔵**から富田村・政所に移り住んでいる。

筆者の家に引き継がれている『過去帳』（註⑤）には、芸州の前に駿河の国に住んでいたと記録されている。その概要を以下に記す。

「藤原朝臣吉原改め兼﨑姓となる。藤原鎌足公の後、開祖は藤原親能上式部太夫である。富士の裾・駿河の国二萬貫領主に長く仕官した。その後、備後（現在の広島県東部）の吉原に居城する。天文の頃、毛利元就公に仕え、石見銀山の山吹の職を勤めた。慶長五年 関が原の合戦ののち、住国を退去し周防国山里に来て、四熊に住む。以降、世代の録を記す。（中略）また、長船祐定の門下となり鍛冶を学んでいる。」

開祖・茂久より六世のちの**茂歳**のとき、兼﨑家は大きな転機を迎えた。正徳六年二月二八日に、十右衛門息子・茂歳が、元次公（三代徳山藩主）に武士として召抱えられる（十五石・御蔵本付）。周防国に居住して百十二年目のことであった。しかしながら、同年四月一三日には万役山事件により、徳山藩は改易となった。

五代広豊公のときには兼﨑一族から与八郎**直應**と孫右衛門**久治**の二家が藩士として召抱えられた。以降、明治四年六月の徳山藩終焉までの間、橙堂の家系を筆頭に兼﨑三家が藩士として仕えた。三家系は、その通字に夫々「茂」「久」「直」を使っている。

一方、十右衛門から分かれた**十太夫**の家系（筆者の家系）は農業を営んでいた。茂歳の息子・**茂親**には男子がいなかったので、十太夫・三男**茂貞**は叔父・茂親の養嗣子となり**茂澄**（五石加増され二十石徒士となる）、**茂昌**（**橙堂**）へと続いた。（図1・系図参照）

徳山においては現在、兼崎一族には四家の存在が確認されており、大迫田墓所にその四家の墓が存在する。

三、大坂・堺への遊学と親戚・播磨屋

橙堂は、文政四年（一八二一）に誕生。一八歳のときはじめて堺へ遊学する。天保九年（一八三八）五月二六日浜崎の港より乗船、海路にて六月一日、大坂天保山下に着。大坂土橋筋（現在の大阪市西区立売堀）の親戚・播磨屋忠兵兵衛宅へ行き、徳山藩人松岡皆人に会う。そこで数日滞在し、六月六日に藩校鳴鳳館教授・本城太華、徳山藩人松岡皆人の紹介で、堺の斎藤五郎鸞江（らんこう）の塾に入った。

大坂土橋筋の播磨屋忠兵衛宅は、大塩平八郎終焉の地・美吉屋五郎兵衛宅（同市西区靭本町）の近くである（註⑥）。

忠兵衛の妻（菊）は橙堂父・小右衛門茂澄の伯母、つまり橙堂からみれば大伯母になる（十太夫の次女で茂貞の姉）。播磨屋忠兵衛は、大坂土橋筋の町中で下駄屋を営んでいたようであり、茂澄や橙堂は親戚・播磨屋を頼りにしていたと考えられる。

写真１　橙堂画像（註⑧）

前述の『過去帳』によると、大坂に居住している「東之坊」の娘・弁と申す女が来国し、十太夫娘・菊を連れ帰った、そして大坂土橋筋播磨屋忠兵衛妻に嫁す、と記録されている。兵庫県三田市の聖徳寺には、播磨屋忠兵衛の存在を傍証する釈迦十六善神像がある（註⑦）。

橙堂は一八歳から三一歳までの十三年間の多くを、

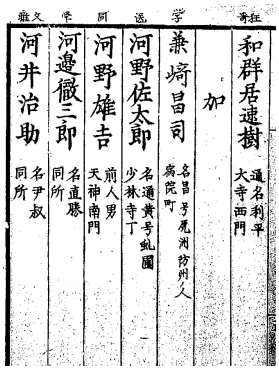
和群居連樹　通名利平　大寺西門
加
兼崎昌司　名昌弓尾州防州人　寄院町
河野佐太郎　名通貫号虱國　少林寺丁
河野雄吉　前人男　天神南門
河邊徹三郎　名直勝　同所
河井治助　名尹叔　同所

写真２『左海人物誌』

堺で遊学している。二〇歳のときには、萩・明倫館で学ぶ。二十一歳からの五年間は、文学修行のためとして藩に願い出て、大坂・堺など各地で勉学に励んだ。

堺では、宿院町（紀州街道沿い）に居住していた。**写真２**は、嘉永四年（一八五一）三月に発行された『左海人物誌（註⑨）』より転載したものであり、この頃は自ら堺で私塾を開いている。掲載人数約一五〇人の中に兼崎昌司（橙堂）の名があり、防州人としてこの宿院町で確固たる存在感を示していた事が窺える。

恐らく徳山に帰る意思はなく、この堺の地で生き抜く覚悟だったのであろう。日本を代表する仁徳陵古墳が作られ、中世から貿易港、自治都市として発展してきた堺は、千利休により大成された「茶道」文化の町でもある。詩文を嗜み学問に励んでいた橙堂にとって、堺は歴史と伝統を礎に夢とロマンに満ちた自由都市だったのである。

なお、二十七年後にこの地で、老舗和菓子商「駿河屋」の娘・鳳志よう（与謝野晶子）が生まれている。

四、家柄断絶と再興

橙堂二五歳のとき、弘化二年（一八四五）一月父・茂澄五九歳で没。嫡男橙堂が堺から帰国しようとしないのを憂慮した茂澄は、晩年には、養子**幸勝**（勝蔵）を迎え家督継承を願い出ていた。苦渋の選択ではあったが、茂澄没後、願いが叶えられ二ヶ月後の三月家続許可が下りる。

しかし、弘化四年（一八四七）養子紛紜事件が起き、翌年嘉永元年（一八四八）七月お咎めにより家柄断絶・家屋敷没収となった。代戸主を立てる事も出来なかったのである。この時、橙堂は堺からの帰国期限に遅れたため、他国外出禁止処分の身であった。

断絶後は、橙堂は慙愧の念でまた堺へ戻っていっ

た。母は洗濯などをして諸家へ寄居し、妹は他へ縁付き、養子幸勝は実家に帰った。

嘉永四年（一八五一）に、福間左衛門・藩校興譲館学頭の薦めで堺より帰国した。同氏の推挙により許され、兼﨑家再興なる。同年八月一七日、橙堂禄高二十石、格式御徒士として召出される。三十一歳。

恩人である福間家の墓は、橙堂の墓と同じ周南市大迫田金剛寺墓所にある。

五、相模での警衛（砲台監察・大砲方を任命）

嘉永六年（一八五三）六月三日、浦賀沖にペリー米艦隊四隻が大統領国書を携え来航した。同年十一月、幕命により萩藩主毛利敬親は、相模国西浦賀から腰越八王子山に至る西南海岸に砲台を築き兵を配し、益田親施を総奉行として相州警衛にあたる事になった。

翌嘉永七年（一八五四）四月、敬親は警衛地の一部を四末家に分担させることを決定した。萩藩による相州警衛は、単に防備だけでなく管内の民政をあげて一任されたので大規模なものとなった。よって財政負担の軽減をも図るための対応であった。

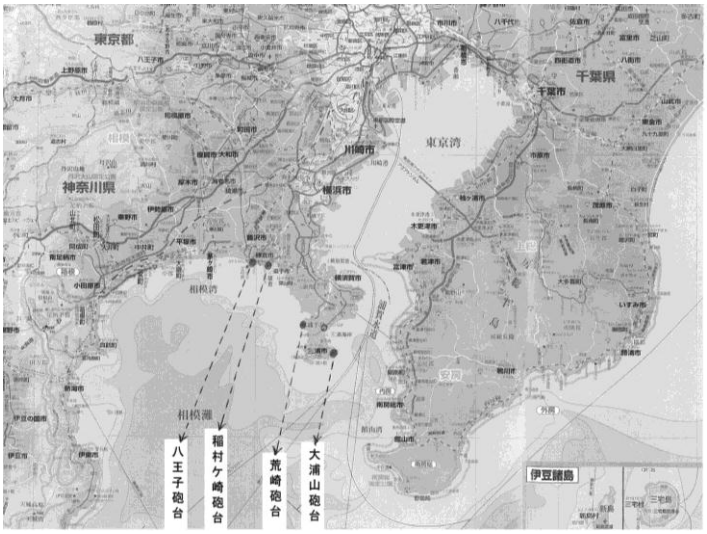

写真３　相模での警衛地（徳山藩：大浦山砲台）

その割り当ては、大浦山砲台は徳山藩、八王子砲台は長府藩、稲村ヶ崎砲台は清末藩、荒崎砲台は吉川家となり、**写真3**に相模での警衛地四ヶ所を示す。

徳山藩主元蕃は、安政二年（一八五五）三月一日、二年前から江戸詰めであった橙堂に砲台監察兼大砲方を任命した。その命により伊ヶ崎準太と同道して三月七日に江戸を発した。両人はそれぞれ荒仕子一人ずつを従え、拾匁筒を携えていた。

同月一二日には江戸留守居役・松野幹右衛門が、物頭、軽卒ら三〇数名を率いて上宮田の原陣屋に到着。翌日、大浦山台場の授受を終えた。徳山藩の相州警衛は三年間におよび、安政五年六月まで続いた。

写真3で分かるように、徳山藩が担当した大浦山砲台は三浦半島の先端に位置し、江戸湾に通じる浦賀水道を警衛する重要拠点である。

なぜ橙堂がその軍事施設の砲台監察兼大砲方を命ぜられたのか？　その背景には、橙堂の家系が毛利家に仕えた刀鍛冶であったこと、及び鉄砲鍛冶の町として知られている堺で、長い間勉学に励んでいたことから砲術に造詣が深かったと考えられた。（江戸時代の鉄砲の八割はこの堺で生産されていた）

その布石として、嘉永六年（一八五三）橙堂は江戸に於いて御用間合いの節は西洋流砲術の修行をする旨、予め仰せ付けられている。本格的に西洋砲術を学ぶよう藩命が下された。そして同年六月以来、佐久間象山に師事し砲術を学んでいる。

六、高島流西洋砲術の免許皆伝

橙堂は、嘉永六年（一八五三）三月から安政五年（一八五八）五月までの約五年間にわたり、江戸番手および相州警衛を務めた。その内、三年余りを浦賀にて過ごす。安政四年（一八五七）九月二八日より、浦賀与力・岡田増太郎に師事し、最新の「高島秋帆流西洋砲術」を学んだ。半年後の安政五年（一八五八）四月一〇日、高島流砲術皆伝を授けられる。

高島秋帆は、西洋砲術の普及に力を注いだ兵学者

で高島流西洋砲術の創始者。長崎の町年寄兼鉄砲方の家に生まれ、天保六年（一八三五）青銅製モルチール砲鋳造に成功。これらの成果を基に高島流砲術を完成させ、砲術と洋式銃陣を教授するようになった。

天保一二年（一八四一）武蔵徳丸ケ原（現東京都板橋区）で日本最初の洋式砲術演習を行った。これにより幕府の高島流砲術採用が決まり、幕臣の江川太郎左衛門（坦庵）・下曾禰金三郎に伝授し長崎に帰郷。江川太郎左衛門のもとには、西洋砲術を学ぼうとする幕臣や諸藩の藩士、松代藩士の佐久間象山など多数集まってくるようになった。

幕末の志士である吉田松陰や坂本龍馬、河井継之助らも、この高島流西洋砲術・銃陣の大きな影響を受けている。井上馨、黒田清隆、大山巌など、明治維新で名をなした人材も学んでいる。

徳山藩で高島流砲術を学んだのは、橙堂が初めてであった。子孫の家には、その授けられた「高島流砲皆伝箇条」が遺されている。流祖・高島秋帆、下曾禰金三郎、そして岡田増太郎の名が記されており、次の七ヶ条からなっている。

一　歩騎砲三兵之編成
一　諸弾之製薬器械之製造
一　大小炮銃箇架二様之制度
一　廂車輜重車之製作
一　城塁之築造
一　三軍之人数配当陣営作法
一　着発弾之秘事

七項目すべてを習得して初めて皆伝となる。高島

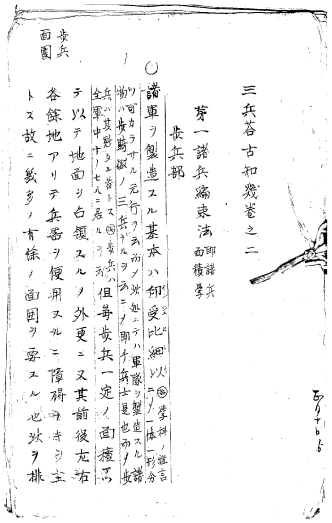
三兵答古知幾巻之二
第一諸兵編束法
歩兵部

写真４　橙堂が書き写した
『三兵答古知幾・巻之二』

秋帆は砲術のみならず「歩騎砲三兵之編成」のような洋式銃陣についても重視している。その教科書とも言うべき『**三兵荅古知幾**』（さんぺいたくちいき）巻之二写本を、**写真４**に示す。高野長英が翻訳したオランダの兵学書を、橙堂が竹製ペンで書き写したものである。

三兵とは、歩兵・騎兵・砲兵をさし、「**荅古知幾**」とは、オランダ語の戦術を意味するＴａｋｔｉｅｋの音訳。これらの兵を連携して円滑に運用することを目的とした戦術である。『**三兵荅古知幾**』は、戦略理論の概念を持たなかった当時の識者に大きな影響を与えたようである。

七、徳山藩における砲術指南

安政五年（一八五八）四月、橙堂三八歳のとき高島流砲術皆伝を受け、同年六月一一日帰国した。一〇月一八日に、遠石浜辺にて西洋流打方の演習を行っている。その様子を、藩主元蕃公が上覧された。

一二月一五日、賞美として銀五〇目を賜り、徳山藩西洋銃陣副教授方となる。その後、舞車練兵場（新角（かくば）場）に於いて三年半にわたり、藩兵へ最新の砲術及び洋式銃陣の指南を行った。橙堂への喝采と憧憬のなか、最も輝いていたときであった。

従来の藩砲術は、中島流など和式砲が主流であった。泰平の世にあっては、砲術は個人技に偏っていき、大砲や鉄砲は実戦から遊離したものへとなっていた。だがペリー来航を機に、砲術は再び脚光を浴びる（註⑩）。橙堂が伝えた高島流砲術は銃や臼砲（モルチール砲）等大砲および洋式調練であり、その意義は銃器の規格化と組織的軍隊の編成を促進させた事であると云われている。**写真５**は、橙堂が砲術指南を行った舞車練兵場跡（新角場）に建つ石碑である。

翌年安政六年（一八五九）一二月二八日には、棟梁大工・引頭常右衛門の姉寿賀（スガ）と結婚した。文久二年四月には

写真５　石碑・新角場跡（周南市清水町）

嫡男・茂樹が誕生する。（茂樹は幼名・百合蔵、民蔵で、俳人・地橙孫の父である）

八、京都での国事周旋と病没

藩主・元蕃は、文久元年（一八六一）参勤で江戸藩邸にいた。文久二年五月四日、元蕃公を江戸より護衛し迎え帰すため、橙堂は、福間刑馬、江村彦之進、児玉次郎彦等と徳山を出足した。六月四日江戸着。一〇日、藩主元蕃に随行し江戸発。七月二日、元蕃京都着。寓居（ぐうきょ）の大徳寺・黄梅院（おおばいいん）に入る（黄梅院は毛利家の菩提寺で、毛利家や福原家の墓が現存している）。

このとき長州藩は、朝廷へ攘夷を説く京周旋を行っており、元蕃は敬親父子を補佐していた。橙堂は江村彦之進らと共に、元蕃公の河原町長州藩邸への往来時などに、警備のため随伴している。そして、攘夷勤王の事を長州藩士・周布政之助、小田村文助、土屋、来原（くるはら）良蔵、桂小五郎らと共に計画中に、病に倒れた（註⑪）。宗藩御典医・青木周弼（しゅうすけ）（小田村、桂らの口添え）の診察の甲斐もなく閏八月二九日、生後四ヶ月の嫡男茂樹を残して大徳寺・黄梅院にて没す。四二歳。

同寺に墓が建立され、その墓表「徳山藩士兼崎昌司墓」は江村彦之進の揮毫（きごう）である。墓建立費は、本城清、亀谷悌次、生田森衛、信田作太夫、江村純一郎らからの香典による。

周南市大迫田・金剛寺墓所には、知友・島田南村書の「橙堂兼崎先生墓」がある。西洋流砲術の弟子及び知己の義捐金により、文久三年に建立された。

九、おわりに

四境の役（第二次長州征伐）では、両軍の主力部隊が芸州口で激突した。このとき、徳山藩諸隊では「**臼砲隊**（きゅうほう）」が編成され“小瀬川（おぜがわ）の戦い”で活躍した。橙堂が三年半にわたり藩兵に指導した砲術のうち、臼砲（モルチール砲）による隊（四二名）である。

鳥羽伏見の戦い（八幡・橋本の戦闘）では、毛利元功（もといさ）が自軍・徳山藩の砲術部隊に対し全幅の信頼をもって

いた事が、彼の言動から窺える。

禁門の変後、伊勢津藩(藤堂藩)は山崎の狭隘部の警備を命じられて、山崎・橋本に砲数門と八百余名の兵を置いていたから、この藩の動向が戦局を大きく左右することになった。毛利元功は初めて兵を率い出馬して伊勢津藩の軍営に入り、「若し伊勢津藩にとって旧幕府軍に発砲することが忍びない場合は、暫く砲を借り、徳山兵が砲を操作して、幕軍を砲撃したい」と申し出たので伊勢津軍は協議の末帰順に踏み切ったという（註⑫）。

戊辰戦争の硝煙の中で近代日本が誕生した。徳山藩の先駆者として高島流西洋砲術を指導した三年半は、橙堂にとって最も意義深いものであり彼の人生が凝縮されている。そして、最後の力を振り絞っての絶筆となったこの漢詩に、橙堂の心境がよく表れている。

【橙堂の辞世】

従昔人世誰無死　々葬京城亦因縁
惟憾他年攘夷日　不発大砲碎火輪

読み下し文

昔より人世誰か死する無からん　死して京城に葬むらるも亦因縁なり　惟だ憾む他年攘夷の日　大砲を発して火輪を碎かざるを

昔から人の世に死なない者などない。死んでこの京都に葬むられるのも何かの因縁だ。ただ残念なのは先年の攘夷の日に　大砲をぶっぱなして黒船を撃ち砕かなかったことだ。

火輪は汽船のこと。ここでは黒船（外国船）を指す。

これから歴史の舞台に上る寸前に、志し半ばで逝った橙堂。自分が学んだ砲術を使い攘夷を果たし、新しい時代をつくることが橙堂の願いであった。

註

①会誌『徳山地方郷土史研究』、二三号、一一頁、平成一四年、小林省三著(副会長・当時)

②『橙堂遺稿』兼崎茂樹著　明治四四年七月発行

③『我が家我が藩の記録』兼崎茂樹著　大正四年発行

④『萩開府-毛利輝元の決断-』　北村知紀著

⑤『過去帳』（筆者家蔵）

⑥大塩平八郎終焉の地（大阪市西区靭本町）、美吉屋五郎兵衛宅で天保八年三月二七日 自決。橙堂/斎藤塾へ入る一年前の出来事である。親戚「播磨屋」は、土橋筋（西の心斎橋筋と呼ばれていた。現在の大阪市西区立売堀）にあった。この地から大塩終焉の地までは目と鼻の先である。現場へも足を運んだであろう。若い橙堂にとって「大塩平八郎の乱」は衝撃であり/尊王攘夷志士となる一要因を成す背景であったと考えられる。

⑦聖徳寺の釈迦十六善神像は、国指定の文化財となっており、表装裏面に天保十二年（一八四一）大坂の播磨屋忠兵衛が家内安全のため太山寺什物（じゅうぶつ）として施入したとある。堺の斉藤鸞江（らんこう）へ入塾・遊学を始めた年（一八三八）から三年後のことである。

⑧写真１　兼崎橙堂画像（安野華貫筆）兼崎香澄氏蔵

⑨『左海人物誌』、堺市教育委員会学芸員・井溪明（いたに）氏提供史料

⑩歴史群像シリーズ『図説・日本武器集成』、学習研究社発行

⑪『徳山名士墳墓掃苔録』兼崎茂樹著　大正八年発行

⑫この日出撃し活躍した徳山藩兵は、第一中隊二番小隊（山崎隊参謀・有福次郎）と第三中隊二番小隊（庄原確平）などである。この津藩の裏切りで旧幕軍は甚大な痛手を受け、大坂へ潰走したのであった。会誌『徳山地方郷土史研究』、二七号、一九頁

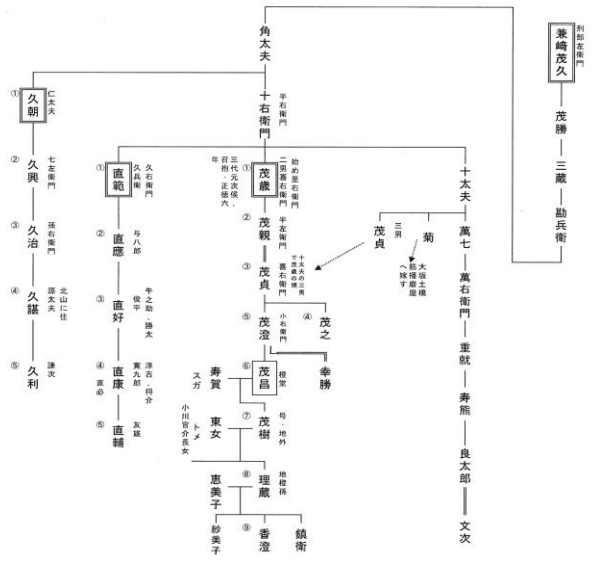

図１　兼崎家一族略系図